

# 日本照明家協会雑誌

Journal of Japan Association of Lighting Engineers & Designers



[www.jaled.or.jp](http://www.jaled.or.jp)

5

2012 May

No.503





# 「常に全員を舞台に上げる。 これは最初からずっと変わらない スタンスです」

中学校演劇指導者

## 斉藤 俊雄さんに聞く

インタビュー／編集部

写真撮影／小川 峻毅

高校演劇の手前に中学校演劇がある。だが、時折注目される高校演劇に比べると、中学校演劇に目を向ける人は少ないのではないかと。今回は、中学校演劇で中心的な役割を担っていらっしゃる斉藤 俊雄先生に、中学校演劇についてお話を伺いました。

### 英語が必要で、教えることが好きだったから

●はじめまして。斉藤先生は、高校の演劇部の生徒さんから時々お名前が出てくるので大変興味を持っておりました。本日はよろしくお願いいたします。

まずは、先生になろうと思った経緯。教えていらっしゃる科目は英語と伺いましたが、なぜ英語を選ばれたのから聞かせてください。

英語を学びたかったのには2つ理由があって、1つは映画が好きだったことなんです。大学で英文科に進んだのは、字幕なしで映画が見たかったからです。

もう1つの理由は、趣味の手品です。私は手品をかなり本格的にやっていたんですが、当時の日本には手品の専門書があまりなかったんです。手品の良い本は、どれもこれも英語だったので、原書でそれを読んでみたいと思ったんです。純粋に英語が好きだったというよりも、

英語が必要だったので、英語の道を選んだんですね。

●そういった映画や手品へのご興味と先生になることは、つながりにくいのですが、何かきっかけがあったのでしょうか。

私の身内に教育者が多いんですね。そんな影響があるんでしょうか、私は人に教えることがとても好きなんです。一見繋がりが無いように見えることが、私の中で結びついているんです。映画や手品と教育は私の中で繋がっているんです。

### 演劇部との関わり

●演劇部での過去の記録を拝見すると、最初に注目されたのは、ジャズダンスのフェスティバルで賞を取ったことのようなのですが、生徒さんたちをなぜ参加させようとお考えになったのでしょうか。



入賞したジャズダンス  
を組み入れた劇

部室の中でただ台詞を言う練習だけだと、活動が静的になってしまいますよね。中学生という動きたくてうずうずしている時期に、部屋に閉じこもることの多い練習ばかりやっていると、日々の練習が沈滞してしまいがちです。妹がジャズダンスを習っていたので、妹に手伝ってもらって、表現を向上させるひとつの手段としてジャズダンスを練習に取り入れてみたんです。そして、せっかく練習しているのだからとフェスティバルにも参加してみたら、賞に入ってしまったんです。賞は副産物みたいなものだったんです。

●参加された団体で、中学校の団体は他にあったのでしょうか。

私たちだけでした。他の団体は皆、大人のジャズダンスクラブでした。カタカナの名前ばかりのジャズダンスクラブの中で、漢字表記の中学校演劇部は異色でしたね。賞が取れたのは、手品の発想をジャズダンスに取り入れたことが新鮮だったからじゃないでしょうか。あとは和のイメージを持ったジャパニーズジャズダンスを創ったので、欧米のイメージが強いジャズダンスの世界で目をひいたということもあったかもしれませんね。

●やはり中学生が一生懸命やっているといった異色の部分で注目されたということがあると私は感じてしまうのですが、先生はどのようにお考えですか。

ジャズダンスに限らず、転勤して2校目の中学校で行っていた演劇活動は、周りの人たちには異色に映ったとは思いますが。当時の私の作品はほとんどが2時間以上、長い作品は3時間近いものでしたから。中学校演劇部では普通は考えられない上演時間の劇でした。そういった意味では異色だったのかなと思いますね。今の活動は、そのように思われることはないと思います。

## 表現の楽しさを教えたい

●先生が顧問になったとき、演劇部でまず何を教えるようと考えていましたか。

何も考えていませんでした。本当に最初は手探り状態でしたね。自分がどれくらいできるかもわからなかったし、脚本も書いたことはなかったです。

●これまでにたくさんの脚本をお書きになっていらっしゃると思いますが、なぜ脚本をお書きになろうと思われたのでしょうか？

いろいろと脚本を探したのですが、中学生のために書かれた脚本に正直あまり魅力を感じなかったんです。あとは、教育的な配慮として部員全員を出してあげたいという思いがあって、どれくらい書けるかはわからないけれど、書くことに挑戦してみたんです。もう30年近く演劇部の顧問をやっていますが、舞台に上げなかった生徒は1人もいないんです。常に全員舞台に上げる。これは最初からずっと変わらない私のスタンスです。脚本を書き始めたのは、全員を舞台に立たせたいという思いが大きかったから、これが一番の動機付けでしたね。

●演劇を通して中学生に伝えたいことは何ですか。

表現の楽しさですね。「表現とはこんなに楽しいんだよ」「表現というのはこんな可能性があるんだよ」と、これが一番伝えたいことです。

●学生生活には卒業がつきもので、卒業のあと新入生が入ってくるというサイクルがあって、子どもたちは次々と入れ替わっていきます。新入生が入ってくれば一から教えるわけですね。その難しさとか、3年間

で変わっていく楽しさというのは？

そうですね、変わるから面白いんだと思います。ずっと同じ子と一緒にやれば、一人ひとりによりうまくなるとは思いますが、でも、劇がパターン化してしまうこともあります。多くの劇団と違って、演劇部は人が次から次へと入れ替わっていきます。それぞれの生徒が持っている個性が違うので、それに伴って集団も変化します。私は個性を生かし、それを伸ばすことを大きな目標としています。そんな私にとって違った個性が入部してくることは、難しさというより面白さですね。

## 脚本を書く

●個性が変わることとともに生まれてくる脚本も変わってきますよね。脚本は年にどれくらいお書きになるのですか？

1本もかけない年もありますが、最近は1本、多くて2本ですね。

●脚本を書く際に気をつけている点というのはあるのでしょうか。

あります。私は、生徒が等身大の生徒を演じることに、新しいものを見つけようとしています。中学生が中学生を演じて、それは日常をただ模倣しているだけにはならないはずで、そこに新たな発見もあります。もちろん中学生が大人を演じることで、面白いと感じるときもあります。でも大人を演じきれずに違和感を覚えることの方が多いんです。

ただ、中学生が中学生を演じるときは、大人が中学生を演じるより、これはもう面白さが違うぞ、って思うんです。大人が中学生を演じる表現の面白さがわからないわけではないのですが、中学生が本当に魅力的に中学生を演じたときは、これは大人にはまねできないすごいものがあると本気で思っています。

●その年代の子どもたちがその年代の役作りをして演じることで、表現に膨らみが出るということですね。先ほど全員を舞台に上げると伺いましたが、誰がどの役かを頭に置きながら書かれているのでしょうか。

役が決まらなるとセリフが書けないんです。部員全員が頭の中で映像となって浮かんでしゃべり始めると脚本が動き出すんです。とにかく役を決めてから一気に書き始めるという感じなんですね。頭の中で子どもたちが動いてしゃべって、そして脚本ができるという感じです。

●今では個人の脚本集が出版され、他校でも上演されているようですね。中でも『夏休み』という作品は、高校演劇でもたびたび上演されているようです。その作品を創ったときはどのような背景があったのでしょうか。

『夏休み』は24歳のときの作品で、演劇部の顧問になって2年目の本当に若いときの作品なんです。ですから勢いで書いているところがある反面、それがいいのかなという感じはします。今の私は創らない作品ですけどね。

## 親が喜ばない劇は創らない

●今お勤めになっている中学校で、演劇部の盛んな活動は保護者も理解されていると思うのですが、その保護者との関わり方についてはいかがですか。

私は親が喜ばない劇は絶対創りたくないんです。かといって、生ぬるい劇は絶対にやりたくない。新しいことにも挑戦するし、中学生としては大胆と思えるようなこともやるけど、でもそれをやったことで親がっかりするような劇は、私は絶対創りたくない。演劇に詳しい親も、初めて劇を見る親もわしづかみにするような劇をやりたいと思っています。私は教育的であることは、芸術的であることと相反することだとは思っていないのです。正直言って今まで見た教育的な劇の大部分はつまらなかったんですけど、そうだからこそ教育的でかつ芸術的な劇というのはものすごく斬新なんじゃないかと思っています。でも、私にそんな劇、創れるわけじゃないんですけど。

## 教室演劇

●最近の活動は、どのようなものなのでしょうか？



『ふるさと』のワンシーン

今は教室でやることに一番魅力を感じています。

●照明もなし、セットもほとんどなしということですか？  
はい、教室そのものがセットになる教室演劇です。

●劇場設備というものが一切ない学校の教室での公演ということですね。

学校の教室で行う公開リハーサルを、保護者や先生方が見に来てくれるんですが、その空間や距離感がいいんです。大切にしている感情表現のひとつである、子どもたちの表情が一番よく見えるのが教室演劇なんです。

●高校生になると、自分たちでセットを考えたり、照明を考えたりするのですが、中学生は全面的に先生が指示しているわけですね。

私のところではそうです。照明が使えるところで上演する機会がほとんどないものですから。舞台のイメージは私を持っています。本当にシンプルな舞台背景なんです。例えば舞台にただの布きれが吊ってあるだけといった。その布きれに照明が入った瞬間、森に変わるといったイメージを重視した舞台が好きです。私の照明コンセプトは、抽象的なものに照明を入れることで、観客の頭の中に劇とつながりがある具体的なイメージを生み出すというものです。教室が森にもなるし、他の様々な世界にも変わる。要するに観客の頭の中に世界が創ればいいのだと。照明家と一緒に劇を創るときは、私は照明家にイメージをお伝えして、それを具体化してくれるのは照明家にお任せしています。ただ今は、本当に教室さえあればできる、照明のあまり変化しない劇ばかり創っているんですけど。今回の『ふるさと』という劇も、音響もなく、照明は最後に1回夕日がさすだけで、あとはずっと変化がないシンプルなものです。



『ふるさと』のワンシーン

●では、大会のための打ち合わせに時間をかける必要がありませんね。

決められた時間内に打ち合わせを終了させるために、必死になっているところが多いと思いますけど、私の打ち合わせは「音響はありません。照明もラストに夕日を使うだけ、生明かりだけで結構です」で終わりでした（笑）。今回の劇は、あえて地明かりをベースにして創ってもらいました。

東日本大震災の後、出場が決まっていた関東大会が中止になり、更に被災地の状況を見て、私にとっいろいろ考えることがありました。ボランティア活動として部員を引き連れて被災地で演劇をやるということは、子どもたちの旅費等を考えると実現が難しい。けれど、被災地の子どもたちに私の創った劇をやってもらうことはできるんじゃないか。劇を見ることで元気が出ることもある、でもやることのほうがより元気が出ると思ったんです。そして、被災地で大変な思いをしている人もやれる劇を構想し、そこから生まれたのが『ふるさと』です。劇の内容に震災に関することは出てこないのですが、劇の奥深いところに流れる『ふるさと』の思いで繋がっているんです。私は50代ですので、瓦礫を片付けるというボランティア活動では若者のように働けません。ただ、劇の手伝いならできる。被災した学校の中に以前私の劇をやっていたところがあったんです。もし、その学校の子どもたちがもう一度私の劇をやってくれて、それが『ふるさと』だったら、私自身、応援に行くことができますよね。そして子どもたちを元気づけることができるかもしれない。そんなボランティアがあってもいいんじゃないかって思うんです。そんなわけで照明も音響もいらない、机と椅子があればどこでもできる、そういう劇を創ったんです。

●中学校の部活動では休みの日にも活動しているところが多いようですが、演劇部の活動スケジュールは毎日ですか。

私たちの演劇部は皆さんが想像するほどは多くの練習時間を費やしているわけではないんです。土日・祝日は原則としてやりません。朝練もやりません。朝は親が大変ですし、わざわざ30分だけの朝練をやる必要はないだろうと。それと演劇だけの練習では子どもたちの世界が広がらないという思いもあります。子どもたちには様々な体験をしてもらいたいです。月曜日は学校で家庭学習の日と決められているため、部活はありません。ですから練習は火曜日から金曜日の4日間だけなんです。

●週4日だけですか？

もちろん発表の直前は違いますよ。発表の1カ月前、最近では2週間前くらいでしょうか、土日・祝日も練習をします。発表が近づけば、生徒のモチベーションも高くなるし、時間がたつのを忘れてしまう密度の濃い練習ができますから。中にはセリフの少ない役もありますから、あまり早くから役を決めてしまうのは良くないという思いもあるんです。2週間くらいがちょうどいいと思っています。

●平日の部活動は、表現を高めていくための基礎練習になるのでしょうか。

いろいろな劇の一場面を使った表現練習が多いですね。それとダンス。あとは歌などです。発声練習はあまりやりません。発声練習は必要なかもしれませんが、私は声の大きさより滑舌をより大切にしています。舞台上での大きな声に違和感を持つことが私自身多いので、大きな声を出すことよりも自然な発声で自然な対話をするのを大切にしています。

●言葉が伝わるのが大切ということですね。

はい。それと、ずっと大切にしてきたのは子どもたちの「積み木」を増やす活動です。「積み木」はダンスや歌、知識と何でもいいんです。生徒が様々なことに取り組み、様々なことを手に入れることで積み木が増える。積み木が増えればより大きく高く、面白い構造の建築物をつくるようになりますよね。同じように私自身の積み木の種類と数が多くないと、積み木を使って作れるものがワンパターンになってしまって、それは面白くならないですよ。だから私自信も学び吸収し続けたいと思っています。私は時間をかけることよりも密度の濃い練習をすることを好みます。時間を長くかけることで、逆にモチベーションが下がってしまうということも生じると思うんですよ。密度が私にとっては何より大切なことですね。

●ご趣味と言っていいのでしょうか。自然観察もされたりしていますね。ホームページで絶滅危惧種の蜘蛛を発見されたという記事も拝見しました。そういった部分は演劇から切り離された部分でしょうか？

いえ、つながっています。感性というのは、自然に感動することからも育つと思うんです。ですから子どもたちと日光まで出かけて鳥や花を見たりします。そこでの、ワーッとという思いが劇の中で生きるんです。そういうワーッとという思いが今までになかった子には、ワーッとという演技がなかなかできないんです。感動した経験のない子には、「あのときの」と言っても、その

「あのとき」がないわけですから。ですから、様々な体験を通して、感情の引き出しを増やしてあげたいと思っています。



自然観察の様子

●自然観察も劇と通じるものがある。

全部つながっています。

●なるほど。先生のベースはどこにあるんですか。演劇ですか。

私のベースですか。何がベースなのか自分でもよくわからないんですね。一番のベースは教育なのかなとは思いますが、どうなんですかね。

●教え子の中にプロになった方がいらっしゃると思うんですけど。

演劇教育界では「プロを育てるために私たちはやっているんじゃない」が合い言葉のように出てくるので、プロが育ったと言うと、まるでそれが悪いことのような響きを持つことがあるんです。もちろん私はプロを育てることを目標にしているわけではありません。でも、演劇部の卒業生がプロになれば、それはとっっても素晴らしいことなんじゃないかとも思うんです。卒業生の中には現在プロの女優として活躍している子もいます。彼女はプロになった今でも私たちの劇を見に来て、涙を流します。彼女の涙を見れば部員も嬉しいわけで、すてきな交流ですよ。彼女だけでなく、卒業生には演劇部の思い出を宝物にしている子がたくさんいます。引き出しの中には使い古された台本が入っていて、苦しいときにその台本を見たりするそうです。演劇部での経験が、そういった将来への糧になればいいんじゃないかなと思いますね。

## 中学生の面白さ

●中学生の面白さというのは、どこにあるんですか。

中学生は多感な時期ですから、一番大変な時期で

もあるのかもしれませんがね。でもだからこそ面白いと思うんです。若い先生の多くがときに大変だと言う中学生の女の子たちをたくさん見てきたわけですが、多感な時期というのは変化をする時期でもある。それは見方を変えれば面白い。

●教職の道を選ばれたときに、小学校や高校ではなく、中学校を選んで理由は？

教科を教えるのだったら高校が一番いいのですが、教科だけではなくクラスで生まれるドラマを考えたときに、中学校に魅力を感じたんです。それが中学校を選んだ理由ですね。

●舞台という場所で子どもたちが表現するというところにこだわりはあるのでしょうか？

舞台という生の面白さというのはありますね。目の前にいる子どもたちが笑顔を見せたり、本当に涙をこぼしたり、それはやはり映像とは違う生だからこそ魅力なんです。多くの中学校演劇部ではひとつの劇の上演が本当に1回だけなんです。リハーサルは何回かできますけど、観客の前で同じ劇を2回以上上演できることは少ないですね。関東大会に駒を進めれば2回できますが、基本は1回勝負ですから。でも、その1回だけというのが、またいいですよ。

---

## これから

---

●今後についてどのようにお考えになっているのでしょうか。

私はずっと変わり続けることを大切にしているので、変わり続けることは変わらないと思います。以前は大きなホールをいっぱいにするような劇をやっていたんですね。でも、同時に違和感も感じていました。「この子たちの本当の良さがわかるのは教室での上演だ」と思っていました。同時に、市の芸術祭で大ホールを使って上演できるチャンスを大切にしたいと思い、1,200人が入る会場で上演していました。私の喜びは、劇を上演した生徒たちが「良かった」と言う姿を見ることなんです。そのためには観客が「良かった」と言ってくれる劇をやらなければならない。「良かった」と言ってもらうことで、子どもたちも良かったと思う。だから大ホールの観客が喜んでくれる、そのキャバに合わせた劇をやっていたわけです。ホールはいつも満員でしたから、たくさんの人に気に入ってもらえてはいたんだと思います。でも、私が大切にしている表情は前

のほうの人しか見えない。子どもたちの目から本当に涙がこぼれているのに、感想を見ると「泣いているようでした」と書いてある。「本当に泣いているんだよ」と思うけれど、後ろからは見えない。あの頃の複雑な思いが、今大切にしている教室演劇につながっているんだと思います。あの当時は、自分にしかできない劇をやっていたのかもしれませんがね。2時間とか3時間の劇を他の中学校でやるのは難しいですよ。でも今の自分は日本中の中学校で上演できる劇を書こうと思っています。実は今、日本中で演劇部がどんどんなくなっているんです。だからそれを食い止めるための役に立てる劇が書きたいんです。良い劇を上演すると自分たちも楽しいし、見ている人ともつながることができる。そうすると、部もなくならないかもしれない。私の本質は以前と変わっていないのかもしれませんが、周りから見たらずいぶん変わったように見えるかもしれませんね。

●最近では小劇場という空間での劇が盛んです。作品創りの中で劇場空間だからこそできる表現というものもあると思うのですが、いかがお考えですか。

劇場は好きですよ。今の私は大劇場よりも小劇場のほうに向いているかもしれませんね。とにかく上演の機会は多くはないですから、頼まれればどこでもやります。劇を上演すること自体が子どもたちにとっては良い経験になりますから。

---

## 照明家と大喧嘩

---

●先生には、照明家という我々の職業はどう映っていますか。

それは難しい質問ですね(笑)。どう言ったらいいんですかね。でもこれだけは言えます。照明家と意気投合したときは、本当に楽しかったと。とにかく、照明家が私の作品を気に入ってくれないときは、もう全然だめですね。あと、中学校演劇ということで、はなから馬鹿にしてかかる人とはやりたくありません。関わって本当に面白かった方は2人いらっしゃるのですけれど、その2人の方は私たちの劇に対してプロの劇団と関わるのと同じような気持ちでたくさんのアイデアを出してくれるんですよ。そして、私の提案との相乗効果で本当に良いものができたと思います。私を1人の芸術家としても扱ってくれる方とタッグが組めたときは、本当に面白かったですね。でもそのうちの1人の方とは、最初は大喧嘩から始まったんです。「中学校



の教師なのに何を言ってるんだ!」「中学校演劇だからって馬鹿にしないでほしい」とかいろいろと言いつつあげく「じゃあやってみよう」と(笑)。でもとことんやり合った後は意気投合しちゃって、その後8年間ずっと照明を担当してもらったことになったんです。

●先生は脚本家であり演出家であり、部活動の顧問でもあるわけですが、照明家からすれば、顧問というよりは演出家としてのお付き合いという目線になっていくとは思いますが。

でも、多くの場合、最初は中学校の教師という形でお付き合いが始まる。途中で演出家として扱ってくれるようになればいいんですけど、最後まで中学校の教師としてしか見てくれない人とはだめですね。

●今後は、今と同じように教室空間で子どもたちに表現を教えながら照明を使わない劇を?

教室空間でも、そこに照明が入ったら面白いと思うんですよ。教室に机を積み上げて、ぱっと照明を入れると都会の夜になるといった照明を使った方がいたじゃないですか。私も「あの積み重ねた机の隙間から漏れ出す光を工夫すると、この教室空間は面白いだろうな」と思いますね。そんな意味で照明を持ち込んで教室で劇をやるのも面白いなとは思っています。劇空間を生み出せる可能性がある廃校となった学校が今はたくさんあります。そこで演劇を仕掛けたら面白いと思いますね。

●高校演劇では一教室を劇空間にしてしまっている学校もありますね。そういった場所があると、生徒さ

んも面白いだろうし、いろいろ実験的なこともできていいでしょうね。

そうですね。今の高校演劇はとっても魅力的だと思います。多くの中学校の演劇部では高校の全国大会で上演された作品がすごく人気があって、大会に出てくる半分以上が高校演劇として有名な作品だったりします。やっぱりお姉さん、お兄さんが上演したのって憧れるじゃないですか。ちょっと背伸びをしてみたくて高校演劇の作品をやる。その気持ちはわかるんですが、そんな現状を理解しながらも、一抹の寂しさを感じているんです。そんな中、神奈川県の高校演劇の大会で昨年、私の作品が最優秀賞を受賞したんです。最優秀賞は3校を受賞しているのですが、そのうちの1校ではあるんですけど、なんででしょう、中学生のために書いた作品を高校生が上演してくれて、最優秀賞を取ってくれたということは、ちょっと誇らしかったですね。中学生の演劇の魅力は見てもらえないと理解してもらえませんか、そんな機会が増えればいいと思うんです。なかなか難しいところですね。こうやって照明家の皆さんが関わる雑誌に取り上げていただけることで、中学校演劇に興味を持ってもらえたら嬉しいです。

●そうですね。残念ながら中学校演劇を見る機会を逃すと、なかなか次の機会がない。ぜひ機会を見つけて、拝見したいなと思います。これからまた1年生が入って新しい演劇部がスタートしますね。これからますますのご活躍を祈念しております。本日は、ありがとうございました。



照明家との意気投合から生まれたシーン

Profile

斉藤 俊雄(さいとう としお)

1983年中学校の教員となり、教員2年目から演劇部の顧問となり現在に至る。最新作「ふるさと」を上演した久喜市立久喜中学校演劇部は関東大会で金賞を受賞し、全国大会への出場を決めている。「降るような星空」年子どもが上演する劇脚本募集特選・晩成書房戯曲賞、「夏休み」創作テレビ脚本公募(NHK後援)佳作一席、個人脚本集として「夏休み」「七つ森」の2冊が晩成書房から出版されている。

05

## 第39回定時総会開催告示

06

[FACE]

## 「常に全員を舞台に上げる。 これは最初からずっと 変わらないスタンスです」

中学校演劇指導者  
齊藤 俊雄さんに聞く

インタビュー／編集部  
写真撮影／小川 峻毅



26

[REPORT]

## 公益社団法人日本照明家協会 東北地方支援第2弾本部特別企画 懇談会「今だから明日を語り合おう」



33

[TECHNICS]

## 大阪 新歌舞伎座

伊達 小太郎

42

[REPORT]

## 平成23年度全国舞台照明技術者会議 東北支部 技術者会議レポート



15

[STAGEDOOR]

## 『マエケナスの灯』

荻原 康子

16

[N.G.C.SITE]

## N.G.C.座談会in九州

横山 剛志

18

PROFESSIONAL  
LIGHTING RESOURCES

## 照明灯具の大図解47 フォロースポットの大図解6

住山 徹



48

[STAGE REVIEW]

## 村上知義とは何者か『1924人間機械』より

西堂 行人

50

## 平成23年度 舞台・テレビジョン照明技術者 技能認定試験を終えて

湯澤 薫



51

## 舞台・テレビジョン照明のための公開講座 「新人講座」を終えて

秦 仲光

52

## 安全委員会より

53

[各地からの伝言板]

## 関西支部発／東京支部発

53

[Tea Time]

## 「柔らかな円盤のお話」

住山 徹

64

## 直列つなぎ

66

## 事務局レポート

70

## 日本照明家協会賛助会員連名

71

[NYエッセイ]

## NYエッセイ Vol.17

中瀬 有紀

72

[Editor's Note]

## SCRAMBLE

【表紙の写真】 炎

垣根の曲がり角……「たき火」という言葉を聞くと、子供の頃に歌っていた童謡を思い出す。もうすぐ雪が降ろうかという時分、空気がキンと冷え、風が切るような冷たさで頬をさらう晩秋。歌を歌いながら、温かい我が家へと急ぐ夕方の道。家の前では、母がホウキを持って落ち葉集めをしていた。燃える炎からは、土と葉の蒸した香りが漂う。それは、燃えるたき火以上に温かな想い出のひとつ。  
(雪華)

